

書評

国分直一著

『日本文化の古層
—列島の地理的位相と民族文化—』

湯川洋司*

ここに1枚のメモが残されている。「いま興味をおもちのこと、そのほかなんでも……」という問いに、「シナ海沿岸諸地域の文化的折衝の問題に興味をもちます」と回答が記されている。

このメモの主は、ここで取り上げようとする本書の著者にほかならないのだが、それは著者からの強い勧めを受けて、安溪遊地氏（文化人類学、山口大学助教授）と評者が中心になって運営を始めた「みんぞくの会」（命名は著者による）の第1回会合のうちに作成された名簿に記されたものであり、今から8年前の1984年6月9日のことであった。

メモはさらに次のように続いている。「考古学、民族学、民俗学、文献史学の成果を相互補完的にくみあわせていく—そのような方法論に強い関心をもっています。」

ここに示された方法論意識は著者の学問における大きな特色になっている。民族学と民俗学、考古学、人類学の協業的編集をめざした「えとのす」を創刊し、発行し続けてきた著者の行動のうえにもそれは発揮されてきた。

本書もまた上述の興味・関心と方法論とによる成果だと言ってよい。ただ周知のように、著者の本領はやはり考古学と民族学とにあると言うべきであろう。その立場を著者はすでに20年前に自ら「エスノアーケオロジーの立場」として表明されている（『考古学ジャーナル』No.71, 1972）。それは歴史民族学的立場と共通するところが多いと言ってよいだろうが、そうした立場をとるに至った背景には京都大学で西田直二郎、喜田貞吉、三品彰英らに学び、卒業後は台南の高等女学校に教

※山口大学教養部助教授

職を得て渡台し、金関丈夫らと共に考古学・民族学・民俗学の調査研究に没入した経験が大きく作用していたと見て間違いはないだろう。（日本民族学会映像記録プロジェクトによるビデオ『国分直一教授に聞く』、『日本民族文化とその周辺』所収の「国分直一博士略年譜」）

したがって、本書が岡正雄の「日本文化の基礎構造」（『日本民俗学大系』第2巻, 1958）にふれるところから開始されているのもうなずける。そこで著者は、「岡先生は日本文化の特色として、伝統性・混合性あるいは多様性、そしてきわめていちじるしい特殊性などをあげて、それらの特色がいかに成立したかの根本的条件は日本列島の自然環境にあるとしている」と、岡説を紹介しているが、日本列島の自然環境に注意を払う姿勢あるいは自然環境と関連させながら日本民族文化の起源と日本国家の形成の問題を追求する姿勢は本書に一貫していると言ってよい。

その意味で、岡学説を出発点におきながらも、その後数十年に及ぶ間に展開を見せた広範囲にわたる関連諸学の学問的成果を積極的に摂取し新たな研究段階へと押し上げたところに、著者と本書とが放つ独自性があると見られる。本書のタイトル『日本文化の古層』は岡の学位論文『古日本の文化層』を意識したように感じられるのだが、同時にそこにはその後の研究の展開を踏まえて岡学説を超えようとする著者の意欲も感じ取ることができるように思われる。

その岡学説との比較から言えば、岡が比較民族学の立場を方法論の基本に据えたのに対し、著者は自らの足場を考古学をベースにしたエスノアーケオロジー（ethnoarchaeology）の立場に築いたところに特徴があると言えよう。

「考古学研究者が古環境に強い関心をはらいつつデータをとりあげている限りは、民族学が生態的に把握した成果から信頼度の高い示唆をくみあげることができよう」（前掲「エスノアーケオロジーの立場」）という態度は今日まで変わることなく堅持され、本書においても強く意識されている。岡と関心を同じくしながらも方法論的には異

なる立場に立ったことは、結果的に本書は岡学説の検証の意味をも帯びることになったと見られよう。

前置きが長くなったが、そろそろ本題へと進もう。本書は、Ⅰ陸化大陸棚の道、Ⅱ基層文化の地域性、Ⅲ基層文化の系譜、Ⅳ倭人社会と国家形成、という大きく4つの文章から構成されている。いずれも既に発表されたものだが、本書編集の段階で大幅な補説が施されている。

第Ⅰ章は1990年に発表された文章がもとになっているが、ここでの焦点は「いわゆる二重構造」に絞られていると言ってよい。これは骨学的に見た場合に縄文人と弥生人との間に認められる断絶についての解釈、すなわち南方モンゴロイドの上に北方モンゴロイドが渡来したと考える立場をさす、この立場は著者が日本民族文化の起源の問題を考える際の原点となっている。

つまり、南方あるいは北方からの人間の渡来とそれに伴う文化の伝来とを具体的に復原しようとする作業が、遺伝学、形質人類学、比較言語学、先史考古学などの知見を踏まえつつ、日本列島の自然環境の変化に細心の注意を払いながら進められていく。

著者は次のように言う。

「かつてわれわれの祖先は、大陸棚の道を北漸して、列島地区に来到したウルム氷期以降、海峡が切れて孤絶性の強い列島地区において、長い縄文時代を通して、北は北海道から南は琉球諸島にわたって、南方系モンゴロイドの形質的特徴を維持してきたとされることは、形質人類学を通して明らかにされている。その南方系モンゴロイドの形質のわれわれの祖先が、その後の日本人になるためには、北方系モンゴロイドが新たに到来、列島地区の少なくとも主体部において、混血を進める経過をとらなくてはならなかったことも、形質人類学が明らかにしている。」(40頁)

ここに言う「日本人」が著者の考える日本民族と日本民族文化の主体者となる。それを大陸の漢人は「倭」と呼んだが、この「倭」を捨てて自ら「日本」と呼ぶようになって名実ともに日本民族

として自己主張ができるようになったのだと言う。

その場合の日本民族文化は、当然ながら「縄文的生活文化の基層の上に、穀作と金属技術の導入によって形成の進められた弥生生活文化の複合が進められねばならなかった」(40頁)と捉えられる。すなわち骨学的には断絶とも見られる事実を、文化的には継続・重層化と捉えているのであり、その文化的混合性が日本の基層文化の特色をなしているとする。その見方が第Ⅱ章、第Ⅲ章において問題とされる基層文化を見る目に連なっているのである。

第Ⅱ章「基層文化の地域性」は、まず「新人の登場」から始められる。そこでの議論の中心は、対馬海峡、津軽海峡、朝鮮海峡が切れていた洪積世末に新人が登場する場合の渡海的手段とその可能性に置かれているが、そこに古環境に注意を払う考古学者の姿勢が示されている。その態度は続いて「海況の変化と森林帯の変化」の問題についても同様に向けられている。

このように生態学的立場から先史文化を把握する志向は強く打ち出されており、たとえば、青森県西津軽郡木造町にある縄文時代の亀ヶ岡遺蹟から出土した亀ヶ岡式土器に見られる繁縷な文様について、「環境の悪化に対する呪術的対応の深まっていたことの反映ではなかろうか」(62頁)と見る見解などはその端的な現われである。

すでに述べたように著者は、基層的生活文化は縄文文化層の上に、穀作と金属技術を特色とする弥生文化が展開して複合したところにあると考えているが、その弥生文化を列島主体地域(いわゆる本土地域に相当する)はいち早く受け入れたものの、北地と南海島嶼地域においてはそれらの導入が風土的条件により妨げられた結果、主体地域とは異なる様相を呈するとして、両者を区分して取り扱う。

まず列島主体地域に関しては、「基層としての縄文生活文化」が食料採集、狩猟・漁撈に関して確認され、次いで「弥生生活文化の形成」が論じられる。すなわち縄文から弥生を経て階級化が進

み、権力の出現を示す古墳時代から氏族制社会への展開までを見通し、ここに岡学説の「父権的・『ウジ』氏族的・支配者文化」の文化層を比定する。

一方、穀作と金属技術の導入がなかった北地と南海の世界は弥生化が進展せず、したがって古墳文化の形成も見られなかったが、だからこそ「より始源的な縄文的基層文化の伝統がひそめられている可能性が高い」(123頁)ことになる。

その「伝統」を現在において追求する作業は困難を伴うが、その作業が、第Ⅲ章「基層文化の系譜」において展開される。そしてそれは民俗学的手法に依存することにもなる。

具体的には、「採集への関心と肉食の伝統」、「動物霊信仰」、「金属器と金属技術者をめぐる信仰」、「身体変工の習俗とその揚棄の事情」、「養蚕の導入・養蚕とかかわりをもつ信仰」、「水人の信仰と習俗」、「船と航海をめぐる信仰」、「霊の往還をめぐる信仰」、「山ノ神と海の女神」、「太陽の沈む海への信仰」、「くぼみの造られた石(盃状穴)をめぐる信仰」、「葬送、社会の仕組みとその伝統」という13の項目に分けて詳説される。一見して信仰や思想をはじめとする精神世界に焦点が絞られている。

目に見えぬ心の問題について、しかも先史・古代社会のそれを考察する場合には歴史民族(俗)学的な方法がとられることが多く、著者も民俗事象を手がかりにしている点で、基本的にはその方法に従っている。加えてエスノアーケオロジーの立場を重視していることが、著者の推察に幅と深みをもたらしていると言えよう。

たとえば、鳥霊信仰の一例として大阪府四池出土の木製鳥型から朝鮮半島における蘇塗信仰や山口県下関市に伝承されている幟舞との関係を論じた上で、これまで多くの研究がなされてきた銅鐸のうち、小銅鐸の用途を立竿につけて神を招くためと見る一方、大銅鐸を大地霊を鎮めるために用いられたと推定したところなどは、考古学的資料と民俗学的資料とを比較民族学的手法によって接合してはじめて到達できる水準を示しており、

見事な研究成果だと感服させられる。

歴史民族学的方法はこのようにスリリングで鮮やかな仮説の提示を可能にすることは事実だが、他方においては説得力に乏しい局面も窺われる。複葬の問題を扱ったところで、墓石にしるされた年号からは古代にまで遡るとは即断しにくい両墓制の思想を、先史時代以降の複葬の伝統に接続させる見解を提示しているところなどは、もっと慎重であってもよいのではなからうか。両墓制について言えば、それが近畿地方に集中して現われる分布上の特徴が説明できなければ説得力をもちえないだろう。

はるかな時間の流れを遡行し、先史・古代世界を活写する作業は魅力的であり、また必要でもあるが、現代との時間的隔たりの大きさを考えると、説得力をもった推定を確保する努力が一層要求されるだろう。

言い換えれば、人間の精神や思想にふれる問題に関しては物的証拠をもたない推論は相対的な弱点を伴うということである。しかし、著者がモノに即した考古学的なデータを立論の基本に据えられているところは大きな強みであり、そうした方法による仮説の提示は歴史民族学的方法論の発達に寄与するに違いない。

さて、最終章の「倭人社会と国家形成」は本書の中心的課題だと思われる。それは著者が関心を寄せる「日本民族の起源と日本国家の形成」の問題とそのまま重なり合うテーマだからである。

これまでの各章における議論を踏まえて言えば、弥生化が進んだ列島主体地域において階級化が進み、さらに多くの種族が列島に渡来するという過程を踏みながら「日本」あるいは「日本民族」、さらには「日本国家」が形成されてくるのであるが、一方においてはそうした民族的、国家的な統一体に参入しない種族とその文化が辺境地帯を中心に勢力をはっていた。彼こそ国栖・土蜘蛛であり、エミシ・エゾ・アイヌであり、そして熊襲・隼人などであったと見られる。

そうした人々は和朝廷の国家統一事業が進められる過程における戦闘を通じて服属させられ支

配を受けることになる。だが、その進展が北地の方が急速であり苛烈であったのに対し、南海島嶼の体制への組み込みが相対的に遅れたのは、穀類生産性が劣ったからだろうと著者は推論する。

そうした国家形成のプロセスをめぐる議論もまた興味深いだが、それにもまして関心をそそるのは、著者の辺境地帯に生きて独自の文化の華を咲かせた人々に寄せる眼差しの質である。

たとえば、エミシ(蝦夷)、ニギエミシ、アラエミシの関係について、原住種族が農民化したものがニギエミシ(熟蝦夷)であり、山地地域に入った原住種族がアラエミシ(あら蝦夷)と呼ばれ、後にニギエミシは田夷と、アラエミシは山夷と呼ばれたものに相当すると見るのだが、そうした分類からは対比的に「清朝政府による台湾のインドネシア語族の原住民族に対する分類」(212頁)が想起される、と著者は述べる。

それは台湾においては熟蕃や平埔族と呼ばれる漢化した人々と生蕃と呼ばれる原住種族集団が相当する。生蕃のうち山地に拠って激しい抵抗をした人々は山地蕃と呼ばれ、これが山夷にあたと見てよいだろうと言う。

そこに比較民族学的な発想が彷彿としていると見えるが、さらに注意をしたいのは、蝦夷と倭人との交渉に関する記述である。北構保男の『アイヌ史断想』から『続日本紀』延暦18年2月21日の条に記載された百姓夫婦や、三善清行の『藤原保則伝』に登場する小野春風が蝦夷のことばに通じていた事例を引用して、「エミシを和人系のたんなるまつろわぬ、あらゆる民であったと主張する立場をわれわれは今や止揚することができたとしてよいのではないか」(217頁)と述べる。そこに辺境の少数者に寄せる著者の思いも重ねられていると見るのは読み誤りであろうか。

著者のメイン・フィールドは環シナ海にあると

見てよいだろう。そこはいわば「倭種」の世界と言い換えてもよく、必然的に東アジア世界の中で捉える目が要求され、おのずと比較考古学民族学的な研究姿勢が確立されたものと想像される。また一面においては、東京に生まれ台湾で少年時代を送り、さらに大学卒業後の戦中に再び戻った台湾で開始された研究生生活を戦後まで継続し、その後も主として西日本を生活の本拠とされて来た著者の研究人生も反映しているように思われる。

評者が1979年春に台南を中心に台湾を訪れた際に、本書にも登場する藩常武氏をはじめ陳春木氏など著者を知る多くの人びとに出会った。その人びとの誰もが著者を慕って懐かしそうに話題にされることに驚きを覚えた。それは著者の学者としての真摯な情熱と温かい人柄とやさしい眼差しによりもたらされたものだと信ずる。

評者もまたこの10年ほどにわたり著者の近くにあつてその学恩にあずかる幸運に恵まれているが、誰に対しても敬意と情熱とをもって語りかける態度に敬服させられている。そうした著者の人柄はその学問にもまた同様に貫流していると思っ

ている。

台湾を振り出しに出発したと言ってよい著者のエスノアーケオロジー研究は、いまや北に南にそして西に向かって拡大を遂げている。同時に考古学と民族学とをベースにした方法論もまた大きく幅を広げている。対象と方法の拡大を経て東アジア世界を中心にしたさまざまな文化交流史を構築し続ける著者に、今後も変わらぬ活躍をお願いしたい。

最後に、評者の力量不足から不十分な紹介のみに終始してしまったことに対し、著者のご寛恕をお願い申し上げます。

(1992, 第一書房)